

Gundam Wars Online

魚盛丼

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

VR技術が普及した世界についてガンドームのVRMMOがスタートした。

複数の作品を同時に扱つた特異な世界ながら多くのプレイヤー達がそこに向かって  
飛び込み、様々な機体を操つてそれぞれの戦場を駆けていく。

彼らはいつたい、この世界でどう過ごしていくのだろうか……。

※この物語はあくまでゲームとして進行していきます。原作のキャラは今の所出す  
予定はありません。機体は出ると思います。内容に間違いやおかしな点などがあります  
したら感想に書き込んでいつてくれるヒ助かります。

M M M M M  
i i i i i  
s s s s s  
s s s s s  
i i i i i  
o o o o o  
n n n n n

5 4 3 2 1

37 30 22 14 5 1

目

次



# プロローグ

この世界にはVRゲームという物が存在する。

このゲームはその名前の通り、画面越しでは無く仮想空間に入り込む事によつてよりリアルな体験が出来るゲームの事を指す。

数年前にVR技術が確立されて以来、この技術は世の中で色々な事に変化をもたらす事になつた。

娯楽であるゲームもその影響を大きく受けた物の一つである。

それが自然な流れであるかの様に様々なゲーム会社がこの技術を利用したゲームの製作に乗り出し始め、そしてそれぞれ違うジャンルのゲームを競い合いながら世界に配信し出したのだ。

これによりVRゲームはその姿を出現させると同時に世界中に一気に広まつていった。

そして今年、ある一つの新たなVRゲームが目の目を見ようとしていた。

そのゲームの名は『Gundam Wars Online』。

脈々と受け継がれてきた有名なガンダムシリーズ、その作品群の設定を題材として生み出された初めてのゲームである。

このゲームでは各シリーズに登場する勢力をそれぞれの勢力として分け、プレイヤーはそのいずれかの勢力に所属しながら互いに闘い、奪い、協力しながら地上を、宇宙を駆け巡る。

ゲーム内での戦闘は機動兵器モビルスーツだけでなく、戦車や戦闘機、はては歩兵としても参加できるようになつており、またプレイスタイルもパイロットとしてのみではなく整備兵としてもプレイする事ができる。

謂わばガンダム世界においての戦争の再現に挑戦したゲームなのだ。

そんな様々なシリーズが混ざり合つたゲーム世界に今、期待を胸に秘めた多くのプレイヤー達が飛び込もうとしていた……。

「いよいよ始まるのか……」

俺、西田真はそう言つて今話題の新作VRゲーム『Gundam Wars Online』のサービスが始まるのを今か今かと待つていた。

既に登録も済ませており、準備は万端である。

専用のVRメットを手で遊びながらベットに腰かけている俺は、実は余りこのゲーム、というよりガンダムという作品をよく知らない人間であつた。

有名な作品である為、流石に名前くらいは知つていたがあまり興味も湧かなかつたので触れたことも無かつたのだ。

そんな俺がこんなゲームを始めようとしているのは、大のガンダム好きな友人達の影響だ。

たまたまロボットの対戦ゲームを探していた時にその友人の二人に捕まり、二人の「俺達もやるからお前もやれ」的な意見の元にあれよあれよという間に話が進んで、気が付いた時にはこれを買うことになつていたのだ。

俺も特に括りがあつた訳ではないのでその事について文句は言わなかつた。

だが、まさかその後に「予備知識の為の勉強会」と称して行われた各ガンダムシリーズのアニメ総集編の上映会に連日に渡つて付き合わされる羽目になるとはおもわなかつた。

二人の解説付きだつたおかげか、ある程度各作品やその機体に関する知識は身に着ける事が出来たがアレは本当にキツかつた……。  
因みに二人はまだ不満そうにしていたが、俺からすればあれでもう十分お腹一杯である。というかあれ以上は付き合えん。

「そろそろ時間だな」

部屋に備え付けてある時計を見て時間を確認、VRメットを深く被つてベットに横になる。

二人とは一緒にプレイする約束なのでゲーム内ですぐに落ち合う予定になつている。  
あまり待たせるのも悪いだろう。

メットのスイッチをオンにして目を閉じる。

そしてそのまま俺の意識は暗転、仮想空間へとダイブしていく。

# M i s s i o n 1

ダイブしてからどれ程たつたのか、閉じていた瞼の上から光が感じた。それを感じると共に、暗転していた意識が浮上して不確かだつた手足の感覚が戻つてくる。

戻つてきた足の感覚が地に足が着くのを感じ、閉じていた瞼を開けてみた。

「ここは……」

俺がいたのは窓の無いコンクリート製の壁で囲まれた殺風景な一室だつた。俺の前方にはドアがあるが、鍵がかけられていて開きそうもない。

付随していた説明書には確かに入つて直ぐにキャラの作成が始まると書いてあつた筈。なので、恐らくここでなにかするのだろう。

そう思い、改めて部屋の中にドア以外に何かないか見回してみる。

そうしてまず発見したのはいつの間にか俺の後方の部屋の隅に置かれた小さな机、それと椅子だ。

机の上には何かの用紙の様な物が置かれている。

最初に見た時にはこんな物は無かつた。……ハツキリ言つてかなり怪しい。

しかし他に目ぼしい物も無いようなので仕方なくその用紙を手に取り、書かれている内容を軽く読んでみる。

パツと見た感じだとなにかのアンケートの様に見えるその文章には題名らしき物は無く、最初に書かれている一文には『必要事項を記入して下さい』とある。

「……つてコレキヤラ作成の用紙かよ。なんてアナログな」

内容を確認した処、どうやらコレでキヤラの作成を行うらしい。

こういうゲームの場合、大抵はメニュー画面みたいな物が出てくるのが定番なのだが、どうやらここでは他とは勝手が違うようだ。

まあこのままこうしてここでただ突っ立っていてもしようがない、とりあえずさつきと記入してしまおう。

そう考えた俺は引いた椅子に座り、用紙と一緒に置かれていたペンを手に取り項目を埋めていく。

名前の登録と身体データの取り込みは現実世界で終えているので、ここには所属勢力と機体の選択、その他のもろもろを書き込んでいく。

ここで選択出来る勢力は登場作品の5作品の中から11程が登場する。

まず最初に初代機動戦士ガンダムの二大勢力である『地球連邦』と『ジオン共和国』、ガンダムWからは『OZ』、ガンダムSEEDの『地球連合』と『プラント』、ガンダム

Xの『新地球連邦』と『宇宙革命軍』、ガンダム00から『ユニオン』『AEU』『人類革新連盟』、そして最後に各シリーズの傭兵・ジャンク屋・バルチャーを纏めた組合であるオリジナルの組織『ノーライン』である。

一部を除いたそれぞれの勢力には搭乗出来る機体に違いがあり、他の勢力の機体に対して制限が存在する。

またノーライン以外の勢力にはそれぞれの支配地域があり、そこを中心に支配地域を広げたり守つたりしていくのがこのゲームの主な目的の一つである。

そして、俺はこの中からノーラインを選択した。

ノーラインは他勢力が所持出来る機体に制限が設けられているのと違つてそういう物は無いが、その代わりに他ほど組織のバツクアップは期待出来無いというデメリットも存在する。

簡単な例を出すとするならば、機体が何らかの理由で損傷を受けてそれを修理する場合、他勢力なら基地でパーツを請求するだけなのに對し、ノーラインであると各自でパーツを集めなければいけなかつたりするのだ。

それでも俺がここを選択したのは友人二人と一緒にプレイする為である。

ここならば一緒にプレイする予定の二人がそれぞれ使いたい機体が違つても大丈夫であるし、それと同時にガンダムに詳しくない俺がどの機体を選んでも一緒に出来る。

その分ゲームの難易度は上がりそうだが……ま、三人いるし大丈夫だろ。

その次の項目は、いよいよ自分が操る事になる最初の機体の選択だ。  
俺が選べる初期機体は『ザク1』『リーオー』『プロトジン』『ジエニス』『アンフ』の  
5種類からの選択となる。

俺はその中から一体を選び用紙に記入、それから最初に活動を始める場所に連邦の一  
地方を選択するとそこからの細かい項目を最後まで止まる事なく記入していく。

用紙の最後に書き終わった後に机の中に用紙を入れろとの指示が書かれていたので  
机の引き出しに書き込んだ紙をしまい、そのまま元に戻す。

戻した直後、ドアからガシャン、と音が聞こえた。  
もう外に出てもいいらしいな。

俺は立ち上がって席を離れ、ドアを開け放つ。

そしてそのままそのドアをくぐり、今までいた部屋を後にした。

—————

ドアをくぐり抜けて辿り着いたそこは、そことこの大きさのある広場のような場所

だつた。

「ふう、やつとスタートできそうだな」  
辺りを見回してキッチンと外に出れたのを確認出来た為か、少しホツとしたように呟く。

どうやらさつきの余りにも殺風景な部屋の中で、自分でも知らないうちに不安を感じていたらしい。

一度気分を落ち着ける為に深呼吸をし、切り替えを行う。

そこからもう一度周囲の様子を観察し始めようとしたその時。

「おーい、リード!!」

そんな、名前らしきものを呼ぶ男の声が聞こえてきた。

リードは俺が登録した、このゲーム内での名前だ。

ゲームが始まつたばかりの今にその名前を叫ぶ男、そんな奴は俺が知る限り二人しかいない。

声のする方へ振り替えつてみるとそこに普段から見かけるよく見知った面子が2人、こちらに向かってするのが見えた。  
呼び掛けた方が俺に話しかける。

「えーとリード、でいいんだよな?」

「ああ、リードで合つてるよ夏彦」

「リアルの名前で呼ぶなよ……。ここでの名前はバルクだ。ちゃんと前以て教えておいただろ」

そう言つて渋い顔をして訂正をいれてくれたのが俺をこのゲームに引き摺りこんだ友人の内の一人であるバルク、本名茅場夏彦だ。本人曰く、根っからのザク好きであるらしい。

そしてバルクと並んでいるもう一人が――、

「孝則はボルト、でいいんだつけか」

「そうそう、ちゃんと覚えておいてくれたみたいだね」

「人を忘れっぽいみたいな言い方するな、さつきのはわざとだ」

「おいちょつと待て」

ハハハと笑いながらバルクの肩をポンポン叩いているのはもう一人の友人、本名中嶋孝則でここでキヤラ名はボルトである。

本人はメカは全部好きと言つてゐるが、バルクに寄れば「連邦系メカの信者」の気があるらしい。

俺には何の事だがサッパリである。

まあ本人達の好みはともかくとして、これで全員が集合できたわけだ。

「えっと、これからどうすんだっけ？」

「まず忘れない内にフレンドしておこうよ」

そう言つたボルトは携帯のような物を取り出した。

それが何か分からずバルクの方を見ると、バルクも似たような機械をポケットから出して操作している。

「2人共、その携帯みたいなのは何だよ？」

「えっ、ゲーム内の通信用端末だけど。リードも持つてるだろ？」

「…………そんなの貰つて無いぞ」

「全員に配られる初期装備だぞ。ポケットに入つてるよ」

「なんだつて？」

バルクに言われ、あわててズボンのポケットに触れる。

するとポケットに膨らんでいる事に気付き、手を入れて中の物を取り出した。

「…………あつた」

ポケットから取り出せたのは、2人が持つている物と同じ機械だ。いつの間に入つていたのやら。

一先ず電源らしきボタンを押すと端末が起動、画面が表示された。

「ほらあつただろ？ならさつさとフレンド登録しちまうぞ」

「わかつてるよ、ちよつと待つてろ」

初めて触る端末ではあつたが何とか手探りながらフレンド登録の画面を呼び出し、端末に2人を登録した。

その後でボルトに聞いた所、この端末は財布を兼ねている装備らしくもし戦闘等で一旦死んでしまったとしても紛失はしない物らしい。

因みに何でこれの事を知っていたかを質問したら、

「何でつて、これ説明書に書いてあつたよ」

との返事が帰つて来た。

完全に俺の見落としてすねスマゼン。

次戻つた時にちゃんと読んどこう。

「登録も終わつたし、さつさと俺らのMS取りに行こうぜ!!特に俺のザクとかザクとかバルクのザク押しはともかく、確かに機体は早くみたいよね。ノーラインは町にある支部で機体が受領出来た筈だから、そつちに行こうか」

「だな。そもそも機体の為にゲームやつてんだし」

他に出来る事も無いため、文句も出さずにあつさりと話が纏まつて次の行動が決定する。

俺達は自分達が乗ることとなる機体を受けとる為、こここの場所にあるノーラインの支部へと向かう事となつた。

# Mission 2

自分達の乗機を受け取る為、俺達は早速この町の支部へと向かつた。

道を歩きながら改めて今自分のいる町の様子を眺めていく。

この町、アーセルは連邦と他勢力が接する前線の近くに位置する周囲を山間部に囲まれた小さな町だ。

ここから少し離れた場所には連邦の基地もあり時々敵が進行してきては戦闘が発生している、という設定になつていて。

また、ここは基地までの補給ルートに入つており、機体を整備する工場なんかも存在しているらしい。

その為かこうして少し歩いているだけでも町には軍関係の施設が所々に見え、そして道で擦れ違う人の中にも連邦の物であろう制服を着た人が多く見受けられる。

車道にも戦車が通るなど、普段では絶対に見かけない光景だというのにそれを不自然だと感じさせない雰囲気がこの町には満ちていた。

そんな町が生み出している空気を肌で感じながら道を進んでいくと、俺たちを先導していたボルトがある建物の前で足を止めた。

「あつ、ここみたいだよ」

「…………ホントにここか？俺にはここにMSがあるとは思えんのだが」

「いやここだつて。ほら、端末の地図だつてここを指してるし」

ボルトが足を止めたのは町の外周部に当たる区画に建てられた、何の変哲もない二階建ての小さなビルだ。

高さで言えば恐らく10mがあるかないか位しかないであろうそのビルに15mをゆうに超えるMSが入る訳は無い。

そもそもそれらしい搬入口も駐車場でさえ見当たらないのだ。

だがボルトの言うように、確かに地図はここを指し示している。

「一応入つてみようよ。地図にある以上、ここがノーラインの関係施設なのは間違いないんだし」

「そうだな、他に行く当ても無い。リードだつて同じだろ？」

ここで少し考えたが俺には特に反論は無い。

まあ、バルクの言う通りでここ以外で行く場所なんてさっぱりな俺には入る以外の選択肢が無いのは確かだな。

特に拒否する理由も無いのも同様だ。

「…………だな。一度入つてみるか、つてあれ？ボルトは？」

「先に中に入つてもらつたよ。お前一旦黙り込んだりすると長くなる癖あるし」

「うお、そりや悪いな」

俺が返事と共に顔を上げ二人の方を見ると、さつきまで一緒に居た筈のボルトの姿が消えていた。

どうやら俺が考え込んでいる間に、先にビル内部へと進んで行つてしまつていたようだ。

……うーん、この癖も気を付けないといかんな。

普段ならまだ問題ないが、このゲームだと戦闘中とかに注意散漫なのは致命的な事につながりかねんし。

「ほら、俺達も行くぞ」

「あつああ、そうだな」

俺を急かしながらビル内へと進んでいくバルクの後を追いかけ、俺もビルの入り口をくぐつて行つた。

ここで時間を喰つてボルトをこれ以上待たせるのも悪い。

—————

「あ、やつと来た。オーケー人とも！」

バルクに続く形で俺もビル内へと入る。

俺達が中に入つてまず見たのは古いコンクリートむき出しの内装、そして受付らしきカウンターからこちらに呼びかけているボルトの姿であった。

ボルトの前にはカウンター越しに職員らしき男性が座っている。掛けられた声に反応にして俺達二人もボルトへと駆け寄つた。

「悪い、待たせたか?」

ボルトに近づきながらきちんと謝罪を入れる。

カウンターの男性が俺達の接近に気付くなり「いらっしゃいませ」と会釈してくる。

「別にそれほどじゃないけどさ、戦闘中とかでそんなにボーツとしてるとすぐに落とされるよ?」

「わかってる、気を付けるよ。で、今は何やつてんの?」

「ん? ああこれ」

俺の視線の先にはカウンターの男性側から伸びるコードに繋がれた端末があった。

ボルトの目の前に置かれているのを見るに、恐らくボルトの物だろう。

カウンターの向こうはちゃんと見えないがどうやら設置されているPCのようなものにつながれており、先程の男性がそれでなにか作業を行つていて。

「ここ」でノーラインに登録して、端末にも登録を入れるんだって。話だと身分証と同じ

ようになるらしいよ。それとMSはこここの地下にあつて、そこで受け渡されるんだつて」

「ふーん、そうか」

ボルトの説明に余り興味なさそうな返事を返すバルク。

一見落ち着いては見えるが、先程からカウンターに置かれた手の仕草からそわそわとした落ち着かない様子が見てとれた。

既に意識が完全にMSにいつてしまっているらしい。

そんな中、カウンターの男性がずっとPCの画面に向いていた顔を上げた。

「――お待たせ致しました。これで登録作業は完了となりました。なのでこちらの端末もお返しさせていただきます」

「どうも。ほら一人とも」

「うん、次は俺達二人のノーラインへの登録を頼む」

「登録ですね。では端末をお預かりします」

男性に自分達の端末を渡す。

俺達の登録待っている間、ボルトが何かに気付いたように登録作業中の男性に声をかけた。

「あ、あとこの三人でチームを組みたいんですが、それってここで出来ますか?」

「問題ありません。チーム登録を行う場合、また端末お預かりしますが」「わかりました。チーム名は『フリーラン』で」

「この三名でチーム名はフリーラン、ですね。お待ちください」

こうして俺達『フリーラン』はチーム登録も全て済ませ終わると、男性の案内でここ  
の真下にある地下の格納庫へ向かう為のエレベーターに乗り込んだ。

降りていくエレベーターの中、少しずつ緊張感が高まっていく。

——さあ、いよいよだな。

エレベーターが下りた先、そこで俺達を出迎えたのは想像以上の広さを持つた格納庫  
とその両サイドの並んでいるMS達の姿だった。

ここに揃えられているのはみな初期に選択できる機体ばかりだが、勢力どころか登場  
作品も違う大きなMS達が同じ場所に並んでいるのは、初心者な俺でもなんだか不思議  
な気分でなってしまう。

一緒にいる二人も目の前に広がる光景に言葉も出ないようだ。

ただ二人は俺とは少し違う印象を受けたようで、片方は興奮のし過ぎで手が痙攣して  
おり、もう片方は並ぶMSを何やら怪しい眼つきでじっと見つめている。

その二人の姿は、はつきり言つて不審者のソレだつた。

「ではこちらへ。各自の機体までご案内します」

案内してきた職員の先導の元、俺達三人は格納庫の中を進んでいく。

町中とは違い、格納庫の中は広さの割に人の姿はあまり見られない。

また中にいる数少ない人影も皆職員につけられている所を見るに、俺達と同じプレイヤー達なのである。

ノーラインは支配地域を持たない関係上、他勢力と違ひスタート地点をある程度自由に選択出来るので一か所にプレイヤーが集まる事はない。

それに加えて組織の支援が少ないので、公式サイトで最初からチームプレイが推奨されている事から元々のプレイヤーの数も少ない。

この格納庫の人気が薄いのもその所為なのだろうな。

「お待たせしました。こちらがリード様がご購入なされた機体になります。詳しくはそこにある係の者にお聞き下さい」

「わかつた。じゃあお先に。最後に着いた奴から連絡が入つたら集合で」

「おう」「また後で」

「ではお二人はこちらへ」

そうして俺以外の三人は再び移動していく。

男性につれられて去っていく二人の後ろ姿を見送つてから、俺は改めて自分の機体を見上げた。

「これが、俺だけの機体…………」

他に並ぶ機体と比べ、細めの胴体と胸部から前方に飛び出した特徴的な頭部を持つMS。

型式番号 MSER-04 機体名 アンフ

俺が初めて体感する事になるMSを前にして、思わずそんな呟きが口からこぼれた。

# M i s s i o n 3

少しの間機体を眺めた後、俺は職員に言われた通りMSの足下にいた作業員らしき人物に声を掛けた。

「すまない。この機体を注文した者なんだが」

俺の声に反応して作業員が此方を向く。

年の頃は50代前後に見えるツナギ姿、姿からして整備員か何かであろうその男性は俺を視界に捕えると向こうからこちらに歩いてきた。

「あん？お前さんがこいつの買い取り主か……また随分若いのが来たな。まあいい、登録を確認するから出せ」

「？」

「端末だよ、さつさと出せ」

男性作業員に急かされ、慌てて端末を手渡した。

男は端末を受け取ると片手に持っていたパネルに接続、手慣れた手つきでパネルを叩いていく。

「…………うむ、確認出来た。登録名はリードつづうのか」

「何か？」

「いや別に。ただ自分からコイツに乗ろうっていう物好きに、ちょっとばかし興味が出ただけだ」

男はそういうながら、外した端末を此方に返してきた。  
しかし物好きってどういう意味だ？

正直2人と違つてMSの好みなんてよく分からぬ俺は判断材料に乏しい為、偶々目についたこの機体を選んだに過ぎない。

アイツらに聞いても自分の趣味丸出しの機体勧めてするからいまいち宛にならんし。知つてている事だつてあまり多くはない、精々登場作品がガンダム00である事位か。  
……まさかそんなに扱い辛い機体何だろうか？

最初期機体で流石にそれは無いと思うんだが。

俺の思考を余所に男の話は続していく。

「機体の整備自体はもう済んでるから今からでも動かせる状態になつとるぞ。安全の為に今は固定装備以外の火器や各々の弾薬はまだ積んではいないが、そつちに關してはこつから出す時に一緒に渡す手筈だ」

「何か、この機体に乗る時の注意点とかは？」

「そうさな…………、一言言わせてもらうなら一応被弾箇所には気を付けとけつて事ぐら

いかね。なんせこのアンフは構造上、装甲が厚い割りに誘爆しやすいMSだからな。お前さんも知つとるだろうけど」

「…………えっ」

思わず、そんな呆けているような声が俺の口から漏れる。

というか、今何か凄い事をさらつと言われた気がするんだが。しかもしつかり聞いたら聞いたで恐ろしく不安になるような事を。

現に今、この男の台詞を聞いた俺の胸中は不安が大きくなりつつある。

「ん？ 急にどうした。……まさか、今さらビビってんのか？」

「……別に、そんなんじゃないさ」

「ふん、ならいいがな」

少々黙り込んだ俺に男は呆れたような態度で言葉を返してくる。

なんとか驚いたのを誤魔化そうとしたが、どうやらバレバレだつたらしい。こりや完全に呆れられている。

男が俺に呆れるのも無理もない事だ、この男からしたら俺は自分で注文した機体の事をきいて今更ビビつてる情けない奴にしか見えないのだろうし。せつかく整備した機体を渡す相手としては嫌だろう。

これは調べなかつた俺も悪いので言い訳もできんしな。

……ま、それについては今はひとまず横に置いとくとして。

「もう機体には乗れるのか？」

「ここではダメだ。お前さんは新米だろう、事故でも起こされたらたまらん。どうしても乗りたきや町を出てからにしろ」

「ここに訓練所は——」

「無い。なんせ規模の小さい町だからな」

ここで乗れないと分かり少しテンションが下がる。

因みに今の会話に町中が出てこなかつたのは慣れない内の町中は危険であるのと、加えてそれをやるとペナルティーをくらう事になるという理由からだ。

てか、非常時でも無けりや出す必要も無いので今それはどうでもいいか。  
何にせよ自分で動かせない現状じや今俺に出来る事はほとんど無い、大人しく2人からの連絡を待つしかないか。

今頃はアイツラも自分の選択した機体と対面している事だろうし。

(そういうバルクは分かりやすい、つていうか自分からザクザク言つてたから知つてるんだけど、ボルトが何選んだが聞いて無かつたな。初期選択の機体にアイツが好きそうな機体も無かつたし)

壁に寄りかかるて2人からの連絡を待つ間、俺はそびえ立つMSの巨体を見上げながら

らぼんやりとそんな事を考えていた。

あく、暇だな……。

———  
それから十数分後、ボルトからの機体受領の知らせを受けて格納庫を後にした。

肝心の機体は後から輸送車両でMS用の別口に運ばれる手筈になつていたが、どうやらボルトが支部から運搬手段のトレーラーを貰えたらしいので俺とバルクの二人は最初に通つた出入口の前で待つことに。

「…………ボルトの奴、なんか遅くねーか？」

「まだそんなに経つてない。俺達の機体も一緒に持つて来るんだ、暇なのはわかるけどもう少し待てよ」

「俺のザクウ……」

「変な声出すなよ氣色悪い……、あといい加減その体を痙攣させんのも止めろ」

「あと少しであれに乗れると思うと、ハア……ハア……」

「俺の話を聞け」

実物に触れたせいでなにやら暴走気味なバルクとそんなアホなやり取りをしながらボルトの到着を暫く待つ。

というかコイツあれからずつとこんな感じか、よくそこまで興奮出来るな。もはや完全に変態だな。

信者つて怖いわあ…………。

「オーケー！2人ともー！！」

しばらくして俺の耳に遠くからよく見知った男の声が届く。

そちらを向けるとその先にはこちらに向かってくる大型のトレーラーとその運転席から顔を出して手を振っているボルトの姿があつた。

トレーラーは徐々にスピードを落とし、俺達の前に来ると完全に停止した。

「二人ともお待たせ」

「キタ━━━!!」

「案外時間がかかつたな。なんかあつたのか？それにこの車は……」

隣でナニカ叫んでいる変態を意識から外しながら向けた俺の視線の先には、今さつきボルトが乗ってきたリアルでは見た事の無い大きさのトレーラーが。

この車を見た時、ふと俺の中で小さな疑問が浮かんでいた。

確かにこのゲーム内でノーラインに所属したプレイヤーがチームを組んだ場合、MSの運搬手段の少ないプレイヤーの為に最低限MSが乗せられるトレーラーが支給される事になつてゐる。

が、あくまでそれは初期支給の域を出ない物でホームページで紹介されていたのもかなりボロい中古品だつた筈だ。

それは俺も一度見て確認している。

だが今俺の前に停止しているこのトレーラーは紹介されていた物とは完全に別物だつた。

所々に傷が見受けられる事から新品ではないんだろうが、全体的にきれいではある上に大きさも形状も違つていた。

初期支給の車は詰めてもギリギリ2機の搭載が限界であつたのに對して、外から見た感じでもコイツは3機ぐらいならなんとか乗せられそうな気がする。

こんなの一体どうしたんだよ。

「ああうん、まあその辺の説明は後でするからさ。とりあえずここから移動しない？  
…………バルクもそろそろ限界みたいだし」

「ハアハアハア……」、ここに俺のザクが

チラリとボルトが視線を向ける。

その視線の先では先程よりもさらに息を荒げた変質者（バルク）が、MSが収納されているであろうコンテナにへばりついた状態で笑つていた。

ここがゲーム内で無かつたら間違いなく警察のお世話になつっていても可笑しくない

姿だ。

「… というか今すぐ突き出したい。

コイツどんだけザクが好きなんだよ。

「… そうするか。ホラそこの変態！ ここじゃMSに乗れないから移動するぞ！！ いつまでもそんなとこへばりついてないでこっち来い！！」

「… ナヌ!? それを早く言えよ!!」

「さつきから言つてたよ!!」

機体に乗れると聞いて正気還つたのか、ようやくまともな返事をしながらバルクとの後に続いて俺がトレーラーに乗り込み、先に運転席に乗り込んでいたボルトがエンジンをかける。

「それじゃ出発するよー」

その掛け声とともにエンジンが音を立てて作動し始め、俺達とその乗機を乗せたトレーラーはゆっくりとしたスピードでノーライン支部を後にした。

そしてここから、俺達『フリーラン』のゲームが始まる。

# Mission 4

町を抜け、森林に通る一本の野道を俺達を乗せた車両が走り抜ける。すでに町も見えておらず、視界に入つてくるのは前方の道路と左右からそれを囲うようにして並んでいる木々ばかりである。

野道を走るその車両、通常の物よりも遙かに大きいこのトレーラーの運転席部分。そのサイズに合わせたようにそれ相応の広さを持つこの静かな空間、今この場にいるのは運転席でハンドルを握っているボルトと後ろの列の窓際から外を見ている俺の二人のみである。

この場にいなバルクのやつはというと、発進して早々に車両のコンテナ部分に移動していった。

今頃楽しく自分の機体でも眺めている事だろう。

窓際の席から暫くの間、後方に流れていく風景をぼーっと眺めていた俺は横目で現在運転中のボルトを見ながら話しかけた。

「しかしあれだな」「ん？」

「いや、多少見た目が変わっているとはいって、普段自転車に乗つてゐるような同い年の奴の運転している姿を見ると、少し怖くてな」

「はは、気持ちはわかるけど大丈夫だつて。これだつてちゃんとシステムでサポートされてるからそこまで大変じゃないよ。まだ慣れてないから少し緊張するけど」

ボルトは視線を此方に向ける事なく、正面を向いたまま返事を返してくる。軽い調子の声だが本人の言う通り、初めての運転にどことなく緊張しているような感じを受ける。

このゲームでは車などの運転に関してはプレイヤーに不自由が無いように最低限の技能として、スキルなどが無くてもアシストが入るようになつてゐる為、車の運転などをした事の無いプレイヤーでも問題無くこなせるようになつてゐる。

今這樣子を見る限り、緊張はあるもののそこまで大変ではなさそうだ。  
ボルトもすぐにでも慣れてくるだろう。

「だけど驚いたぞ。まさかトレーラーを開始した直後のこの時に買うとか、しかもその為に自分のMSを売り払うなんてな」

俺の言葉を聞いたボルトは苦笑しながらそう答えた。

乗車前に言われた通り、発進して直ぐに俺とバルクはボルトからこの車両についての

説明を受けていた。

ボルト曰く、この車両は格納庫にてその場で購入した物でMSと支給されたトレーラーは売つてその代金した、との事だ。

本当はこんな開始直後から高い買い物をする積もりは本人には欠片も無かつたらしいのだが、支給された車両を受け取つたボルトは、そのスペックを説明されて買い換えを決断したという。

説明によれば支給されたトレーラーは運搬専門の車両であり、簡単な修理さえ行う設備も無かつたのだとか。

どこの勢力にも与しないノーラインに所属しているプレイヤーは勢力からのバツクアップが無い為に殆どの場合、補給などは自分達で都合しながらミッショング等をこなしていかねばならない。

そんなプレイヤーの一員である俺達にとつても、単独行動中に自分達のみで修理行為一切が出来ないというのは当然ながら看過できるものでは無かつた。

ボルトはそのことをゲームの開始前から理解していた為、買い換える決断に特に抵抗は無かつたらしい。機体を売つた事で資金にも余裕が有つたのもその一助になつたのだろう。

「しかし、受け取つた直後に売り払うなんてよくできたよな。俺としてはそつちの方があ

驚いたよ」

「これは機体を売却した時に聞いた話何だけど、他の勢力だと機体は各々の軍隊の所有でこんな事出来ないらしいよ。だけどノーライン所属の場合はプレイヤーが傭兵やジャンク屋扱いだから、MSは個人やチームでの所有物になっているだって。こういう自由な売買が出来るのも、そういう理由からなんだよ」

「へー、ってことはあれか? ボルトも前もつて知つてた訳じやないのか」

「僕の場合、公式サイトのノーラインの説明文を見た時にもしかしてつて思つたから試してみただけ。もしそうなら色々楽になるし」

……確かにボルトの言う通りだ。

元々ノーラインの魅力は使用機体や行動地域縛りが無い等の『自由さ』にあり、その中には物資の売買も含まれる。

そして今の話では装備のみならず、機体そのものもその『物資』の範疇に入っているらしい。

つまり、取引によつて機体にも手が出せるという事だ。

このゲームでは機体を手に入れる方法として、機体の更新が上げられている。

これはミッショントをこなす等して得られたポイントを消費する事でその機体から派生する、もしくは所属勢力に於ける別系統の同ランクの機体を入手する。

これが今現在公式サイトで出ている唯一の機体入手の方法だ。  
しかしノーラインの場合、他勢力とは違つて機体が縛られない分、少々消費するポイントが多い等の不利な事情があつた。

恐らく、金銭での取引が可能なのはこれをカバーする為なのだろう。

……こういうのつて、初めから公式サイトとかに載せておくべき情報じやね？よくわからんけどさ。

さらに、俺にはそれとは別にもう一点気になる事が。

「……だけどお前はよかつたのか、自分の機体売つちまつて」

そう、俺が気にしているのは売却してしまつたボルトの機体に関してである。  
チームを組んでいるとは言え、売却されたのがボルトの機体である以上この事に関して責める積もりは俺には無い。

むしろ気にしているのはその逆で、自分からとは言えチームの為にボルトの機体が無くなつてしまつた事について申し訳ないとすら考えていた。

言うまでもなくMSは高価であり、新しく入手するとなると相当の時間が必要になつてしまふ。

つまりその間、ボルトは機体には乗れないということだ。

だがそんな俺の不安を余所に、ボルトは気とした様子は全く感じさせずにこう返して

きた。

「ああうん、できるなら元から僕の機体は売るつもりだつたからそれは別にいいんだ。選択できる機体に僕の目当ての物は無かつたから。それにどうせ、支給されるトレーラーじゃ3機は載らなかつただろう?」

「まあ、確かに……」

ボルトのもつともな指摘に思わず言葉が詰まる。

確かに初期支給のトレーラーではスペース的にも重さ的にもMSを3機も搭載するなど、とてもじやないが無理がある。

戦力としてMS1機分はかなり大きいが、それが行動の足かせになるならばそれは本末転倒というヤツだ。

それこそ俺達みたいな特定の勢力に所属しないプレイをしようとするならば特に。

「そりやMSに乗りたいって気持ちは無いとは言わないけど、元々僕は整備士がやりたいからこのゲーム始めたんだ。暫くはそつちに専念する事になるだろうから気にする必要はないよ」

「…………ボルトがそれでいいんなら、俺は何も言わないけどさ。トレーラーを変えるつてのも悪い選択じやないと思うし」

「だろう? 実際売つて正解だつたよ。おかげで余つたお金で予備パーツと弾薬も十分

な量が買えたしね』

そういうつて笑いながら話す姿を見て少しばかり安心する。

今回、気を遣わせてしまったようだが本当に気にはしていないらしないな。本人も楽しそうだし、これ以上ウダウダ言うのもアレだ。今はその親切に甘えさせてもらう事にしよう。

そういう話してるうちにボルトがトレーラーのスピードを落とし始める。

窓の外を見れば、何時の間にか周囲を囲んでいた木々があまり無い平原のような場所に到着していた。

気が付かない内にかなり進んでいたようだ。

「……そろそろ街から十分に離れだし、ここで停めとこうか。リードもバルクと一緒にコンテナで機体を下ろす準備をしといてくれ」

「いよいよだな……、いよっし行くか!!」

ボルトからの台詞を受けた俺は、声に出して自分自身に軽く気合いを入れる。そしてそのまま、機体があるコンテナへと移動を開始した。

# M i s s i o n 5

しばらくの間トレーラーを走らせた俺達は、街が見えないくらいの距離がある見晴らしのいい平地に車を停車させると早速MSの起動に取り掛かつた。

コンテナに移動した俺は自分の機体を見て悦に浸つていたバルクに一声をかける。

「ほらバルク着いたぞ！」

「…へつ？」

「機体を出すから乗れって事！」

「…………お、おお！」

俺の言つた言葉が徐々に認識出来たのか、ぼうつとしていたバルクの表情にさつきとは違う喜色が満ちていくとすごい勢いでザクに取りついていった。

それを見た俺自身もアンフの操縦席に乗り込む為、機体の元へ向かう。

安全の為に車内ではしやがんだ状態で固定されていたアンフだったが、それでも搭乗口まではかなりの高さがある。

本来なら搭乗するのに昇降機でも使う場面だがこの車両に乗っているのはたつたの三人、起動の際の接触も怖いので今回は機体から吊るされた梯子を上つていく。

そして梯子を登りきった俺は、さあいよいよ搭乗口を開けて

「…………なんだこれ」

思わず、そんな言葉が口から零れ出た。

特に見ただけでわかる異常がある訳ではない。そもそも初めてこれを見た俺にそんなものがわからう筈もないが。

狭い。ただ狭い。それがこの今日の前にある操縦席を見た時に出てきた感想だつた。それに搭乗口も小さく人によつては肩が引っ掛けかりそうなサイズ、というかちゃんと乗り込めるのかコレ。

そもそもさつきから操縦席言つてるけど席なんて何処にも無いし。

「おーい！なにやつてんのー？」

下から呼ぶ声がする。そちらに目を向けるとこちらに歩いてくるボルトの姿が。

「なんかこれ椅子も置けない位スゲー狭いんだけど！大丈夫なのか！」

「今更何言つてるの?!アンフは狭いのなんて当たり前じやないか！人革製なんだし！」なんかスゴイ台詞が帰ってきたぞオイ。人革製なんだからとか、意味わかんねーんですけど。

え、なに？コレってそれだけで通じてしまう話なのか？もしかして知らない俺がおかしいのか？

——この時の俺はまだ知らない事であつたのだが、そもそも人革、人類革新連盟の機体が他のMSに比べパイロットへの配慮という物があまり考慮されていない事は作品である〇〇を知つていてる人ならば普通に知つていてるべき事らしい。

その人革連曰く、『パイロットはパーツの一つ』のことだ。

……俺、初っ端から機体選択をミスつたかもしれん……。

搭乗口の側で自分の選択を後悔していた俺であつたが、固定具の取り外しをしていたボルトの声に急かされる事になり、ヤケクソ気味に体を搭乗席に放り込んだ。

未だに操縦方法などなにひとつ教わつてなどいない俺だが、流石にそこの所はゲームらしく体の固定の仕方などが詳しく目の前に空中にヘルプとして表示されていた。

ヘルプに従いながら何とか体を固定、上半身を乗り出すような状態に傾けながらアンフ特有である（らしい）固定式のヘッドマウントディスプレイなる物に頭をのせる。全ての作業を終えた俺は、ここでようやく起動スイッチを入れた。

入れた途端、無音だったその空間に音が響き始める。

「おつ」

機体に固定された体に振動が伝わりそれに伴い響く駆動音も徐々に大きくなつて行

く。

それからシステム起動し、目の前の画面が明るく表示された。  
 今映し出されているのはメインカメラの映像だろうか、コンテナ内の壁と床が見える。

『あーテステス。二人とも聞こえてる?』

突如、耳元からボルトの声が聞こえてきた。

突然の出来事に少々慌てたが、すぐさま気を取り直してこちらから返事を返す。

「こちちらリード、ちゃんと聞こえてるぞ。こつちの声はどうだ?」

『OK聞こえるよ、一応アンフの方は問題なく起動出来たみたいだね。バルクはどうだい?』

『…………感動過ぎる、俺もうここでなら死んでもいいかもしない』

『コラコラ早い早い、まだ乗つたばかりでしょーが。あと若干言葉おかしい』

『ま、まあ2人とも起動出来て良かつたよ。それじゃコンテナを開放するからさつさと機体を外に出しちゃおうか。今回は僕が誘導するから、ゆっくりと転ばないようにね』  
 「各自の武器とかは?」

『武器はコンテナの右の壁にあるから、降りる時にでも持つていってくれ。見えるだろ

う?』

バルクに言われ慣れない操作をしてカメラを右の壁へ向けると、そこには何種類かの装備がかけられておりその中で攻撃性のありそうな物は二つ、残りはそれぞれ異なる部分があるものの盾っぽい形状をしていた。

その武器の一つには丸いマガジンに短い銃身、所謂ザクマシンガンつて奴だな。これは流石に俺でも分かるしディスプレイにもデータが出てきたから間違いない。

「へー、武器の種類とか分かるんだな」

『ああ、遭遇した事のある武器は登録されて分かるようになってるらしいよ』

「俺、初めて乗つたんだけど」

『そこにあるのはどれも基本装備だからじやない? もしくはノーラインから支給されたからとか』

ボルトの返してきた返答に成る程と納得する。

しかし、そういう物があるなら後でどれくらい登録されているのか調べなきやならないな。

まあそれはともかくとして、一つがザクの装備となると自然俺の装備はもう一つの方となるな。

もう一つはさつきの物とは違つてかなり大型の兵装だ。

こつちは銃というよりもどつちかつて言うと大砲だな。砲身もかなり長い上に砲口も広い。

んで肝心の名前は……200mm×25口径長滑腔砲って言うのか、こつちもデータが出てきた。

「確認出来た。俺はこのデカいのでいいんだな?」

『そうそう。じやあ始めよつか、コンテナを開けるよ』

『りょーかい』

コンテナの後部の天井と扉が音を立てながら開き、隙間から太陽の光が内部を照らしはじめる。

「よし、まず俺から出るぞ」

コンテナが開ききつたのを確認するとそう言つて俺はボルトの誘導に従いつつ、機体をゆっくりと立ち上がらせるとそのまま外へと歩を進めた。

『さて、いきなりアレだけど2人にはこれからモブ狩りをしてもらいます』

それぞれの機体を降ろした後に行つた多少の動作確認を終えた時、唐突にボルトがそ

んな事を言い出した。

……いやホントにいきなりだな。

「いきなりなのはともかく、……今の俺達で大丈夫か？今の状態でいきなり戦闘って『大丈夫だよ。ここは比較的安全な地球の連邦領、ここで出るのは精々ゲリラの武装車両ぐらいだつて集めた前情報にもある』

『それに前線に近いつて言つてもここは領土の内側だ。正規軍やプレイヤーと鉢合わせする可能性も無いだろう。接している勢力もジオンじやあ無いしな』

「…………お前ら何で初日の今日でそこまで詳しいの？」

『リードにガンダムを見せてる間、僕らは比較的暇だつたからね。最低限情報ぐらい集めるさ』

「…………成る程ね」

ボルトの台詞で辛かつた強制上映会の記憶が巡り、つい顔が引きつる俺。

確かに二人ともアレをやつてる間、俺に解説を聞かせつつもPCで何か調べていたな。

俺なんか宿題とか言つて大量の映像資料押し付けられたせいで公式サイトすらあまり見れてないというのに。

ここでのバルクの言う『ジオンと接して無いから心配ない』というのはゲーム内に於

ける各勢力間の関係からくる台詞である。

このゲームには幾つもの勢力が存在しているが、その全てが対立している訳ではない。

明確に対立があるのは宇宙世紀の地球連邦とジオンなど、元々作品内で対立している勢力に限られている。それ以外とは明確な対立関係は無いが小競り合いがあり何かあれば対立する可能性がある状態、という設定なのだ。

つまり、開始間もない今ならば、ジオンとの境界線に近付きさえしなければ突然激しいMS戦闘になつたりする危険も無いという訳だ。

因みに今居る場所から近いのはユニオンとの境界線である為問題は無い、筈。

『整備士希望の僕としては機体を存分に弄くる為にも、なるべく早く資金が欲しいんだよね』

『リードの不安も分かるけどゲームは習うより慣れろだと思うぜ?』

「うーん、資金が必要なのも確か何だけど」

『そんな事言つて、このゲーム始めたぐらいなんだからお前だつて戦闘してみたいだろ

?』

「いやそうだけどさ……」

『なら問題無いな。はい決定!』

結局、2人に押し切られる形でゲリラ狩りをする事に決まった。

まあ実の所、こんな戦闘メインなゲームを始めた以上戦闘に興味が無い訳が無い。バルクの言う通りだ。

俺自身何だかんだ言いつつも、この決定には不安は有つても不満はないのである。

『今機体に出現ボイントのデータを転送したよ』

『それじゃあ出発だ!!俺が先行するぜ』

「了解、見つけてもいきなり突っ込んだりするなよ?」

『へへっ、わかってるって』

返事を返したバルクが自身の乗るザクを先行させ、俺もの後に続いて送られてきた出現ボイントにアンフを向かわせた。

その俺の後ろを多少の距離を空けてトレーラーが着いてくる。

歩行する度に揺れる機体の中で一人、俺はこれから発生するであろう戦闘に多少の不安と興奮を自覚せずにはいられなかつた。